「喜悦の盈満」

第八講「不信仰の分析」

ルカの福音書18章18～30節

第八講 「不信仰の分析」

一、はじめに

二、不信仰の本質

三、不信仰の暴露

四、不信仰による後退

一、はじめに

なぜきよめを得ることができないか？

その理由は結局「不信仰だから」というところに落ち着く。

不信仰は「きよめ」を自分のものとさせない、その世界に入れさせない究極的な妨害。

しかし不信仰と言っても、その中に生きているとそれが当たり前になり、
不信仰がなんであるかがわからなくなってくる。

それがある以上は「きよめ」の霊的経験は私たちのものにはならないことを悟らなければならない。

二、 不信仰の本質

それは必ずしも不道徳とは限らない。

人間的にはりっぱでありながら、不信仰であるということがあり得る。
道徳的であることと信仰的であることを混線してはならない。

不信仰の特質は、神さまから独立して、自分でいっさいの行動をしていこうという素質。人間が神から独立すること。

神の意志を無視し、計画を踏みにじって、自分がしたいとおりのことを自由にするという原理。

これは意志の問題というより、性質に及んでいる問題。

三、 不信仰の暴露

イエスさまの前に立つとき、不信仰と罪は暴露される。

イエスさまがおっしゃったことばは、この青年の愛着がほんとうはどこにあるか
ーそれが神ではなく、財産、物である、ということ—を暴露した。

神以外のものに愛着や恋慕の対象があるなら、それが物でも人でも、偶像崇拝
であり、罪。

聖霊の光が臨むとき、自分でも自分にそのようなものがあるとは思っていない
ものが自分の人格の中心、意識しないほど深いところにひそんでいる実質である、
ということが、つきつけられる。

自分の中にそれがあるということが分かったときに、どういう態度に出るかと
いうことが問題。

四、 不信仰による後退

不信仰であると、その時に逃げてしまう。そして同じことをくり返す。

聖書に示されている、人間の常識ではわからない啓示と真理を受け入れずに退いてしまう。
その中でこの問題と関係がある神の三つの宣言。

① イエスさまの贖い。

二千年前のイエスさまの十字架が、人間の罪の解決のわざである。これ以外に罪の解決を得る道はない。罪の問題であれば、すべて解決できる。

② 人間の罪性の事実。

世の中の人間礼賛の原理に立つ宗教と違い、聖書は人間は生まれたときから罪の傾向を持った罪の奴隷である、と言っている。

③ 信仰の可能性。

からし種一粒でも、真実な信仰は万能である。

まとめ

どんなにすばらしい恵みが準備されていても、不信仰であるなら得ることはできない。
不信仰とは、後ろを向いて帰ってしまうこと。

神さまがほんとうに心を痛めるのは、私たちが罪の性質を持っていることではなく、徹底した贖いの可能性を示されながら、去ってしまうこと。

自分にはできないということが分かったときこそ、信仰を働かせる絶好のチャンス。私たちにできないから神さまがしてくださるというのが福音。

どんなことでも、このままではいけないと気がついたら、退くのではなく、すぐにひざまずいて祈ること。神にできないことはない。